

土佐国分寺跡

—第三次発掘調査概報—



1991年 3月

南国市教育委員会

土佐国分寺跡

—第三次発掘調査概報—

1991年 3月

南国市教育委員会

序

高知県下には、現在、約2,500個所を数える遺跡が所在することが知られています。このうち南国市には、平成元年度市内遺跡分布調査の成果から 272遺跡が所在し、県内市町村の中で最も多くの遺跡が残されております。

南国市は、県中央部に位置し、市域は高知平野の大半を占めるなど、恵まれた自然環境をもち、古来土佐の文化の中心地でありました。このため、高知県の歴史を理解するうえで重要な遺跡が集中しており、代表的な遺跡についてはこれまで国・県・市指定史跡として保存措置が講じられてまいりました。しかし、現代社会の歩みのなかで急速な勢いで進展する各種開発事業に伴い、遺跡の記録保存のための発掘調査等の件数も増加の一途をたどっており、先人の貴重な文化遺産を保護し後世に継承するうえで、早急な保存方策の確立が望まれております。

土佐國分寺跡は、大正11年10月12日に国の史跡に指定されておりますが、これまで具体的な遺構等は確認されておらず伽藍配置についても不明瞭な状態がありました。そこで、史跡の内容を確認し今後の保存方策を検討するための基礎資料を得ることを目的として、国・県の補助を得て昭和62年度から発掘調査に着手し、第一・二次（昭和62・平成元年度）調査によって、礎石建物跡・掘立柱建物群等の創建期の遺構が発見され、次第に内容が解明されつつあります。

今回の調査は第三次調査として、現寺域の北側を対象に実施されたもので、本書はその成果をまとめたものであります。本年度は、創建期の寺域がさらに北側に広がることが確認されるなど多大な成果が得られており、今後の調査に期待が寄せられます。

最後に、今回の調査にあたり終始御協力をいただいた文化庁並びに高知県教育委員会、財団法人高知県文化財団、また調査に深い御理解と御協力をいただいた地権者の皆様方、国分寺・林廣裕住職をはじめとする関係各位、地元国府地区の皆様方に厚くお礼申し上げる次第であります。

平成3年3月31日

南国市教育委員会

教育長 栄枝利實

例　　言

1. 本書は、平成2年度国庫補助事業として南国市教育委員会が実施した史跡土佐国分寺跡の発掘調査の概報である。
2. 調査は、南国市教育委員会が主体となり高知県教育委員会の指導及び財団法人高知県文化財団の協力を得て実施した。発掘調査は財団法人高知県文化財団調査係長山本哲也、調査員坂本憲昭、曾我貴行が担当し、調査事務は南国市教育委員会社会教育課主幹岡崎聰一が担当した。なお、現地調査では小松大洋の協力を得た。
3. 本書で使用した図面のうち、第1図は国土地理院発行5万分の1（高知）及び2万5千分の1（ときやまだN1-53-28-7-1・高知7号-1）を、第2図は2千5百分の1高知広域都市圏図No9及び16を複数使用したものである。なお、第3図は大正10年8月に作成された国分寺境内平面図（縮尺300分の1）を複製して使用したものである。方位は第1・2図が方眼北（G・N）、第3図が磁北（M・N）によるものである。
4. 出土遺物の実測図は、 $\frac{1}{2}$ 縮尺に統一した。また、遺構平面図及び土層断面図は縮尺 $\frac{1}{20}$ による実測図をも又は $\frac{1}{2}$ に縮尺して使用した。
5. 本書の編集は南国市教育委員会が行い、執筆はI・IIを坂本憲昭が、他は山本哲也が担当した。
6. 調査に際しては、地権者並びに地元国分地区の皆様方、林廣裕住職には多大な御協力を頂いた。また、宗教法人国分寺関係者各位には、種々御協力、御援助をいただいた。文末ながら、ここに改めて厚くお礼申しあげたい。

本文目次

I 土佐国分寺跡の沿革	1
II 調査に至る経緯と経過	3
III 調査の概要	5
IV 上要遺構と遺物	7
遺構	7
遺物	8
V まとめ	9

挿図目次

第1図 土佐国分寺跡位置図

第2図 調査地区の位置

第3図 検出遺構位置図

図面目次

- | | |
|----------------------------|----------------------------------|
| 図 1 土佐国分寺跡概要図 | 図 5 出土遺物実測図(瓦) |
| 図 2 第8調査区(寺域北側地区)
造構平面図 | 図 6 出土遺物実測図(瓦) |
| 図 3 土層断面図(S E 2・調査区東壁) | 図 7 出土遺物実測図(須恵器・土師器・青磁
・弥生土器) |
| 図 4 出土遺物実測図(HL) | 図 8 出土遺物実測図(土師器・土師質土器・
瓦質土器) |

図版目次

- | | |
|---|--|
| P L 1 調査風景(北西から)
同上(南から) | |
| P L 2 S K 1 検出状態(南西から)
調査区北西ピット検出状態(西から) | |
| P L 3 S D 10 瓦出土状態(西から)
S K 2 検出状態(南から) | |
| P L 4 S E 2 (北西から)
同上(南から) | |
| P L 5 調査区南側造構 検出状態(北西から) | |
| P L 6 S B 9・S A 5 検出状況(西から) | |
| P L 7 第8調査区全景(西から) | |
| P L 8 第8調査区出土瓦 | |
| P L 9 第8調査区出土瓦 | |
| P L 10 第8調査区出土土器類 | |

I 土佐国分寺跡の沿革

土佐国分寺跡は、南国市国分546番地に所在し、高知県の中央部に広がる高知平野の中央北側、国分川右岸の微高地上に立地する。

土佐国分寺跡の現状は、一部が畠地、山林となっているほか、宗教法人土佐国分寺（真言宗智山派・四国第二十九番靈場）の境内地となっている。寺域周辺には、創建当時の遺構と推定される土壇（高さ1.5m～2m、3m～4m）が遺存し、大正11年10月に国の史跡に指定されている。

現国分寺は、長宗我部国親・元親父子の再建による金堂があるほか、平安時代前期の作である梵鐘（総高80.3cm、四葉複弁蓮花文の撞座をもつ）、書院南側庭園の庭石として塔心礎などが遺存する。寺域周辺には、土壇及び現金堂北側の段状地形以外は、関連遺構はみられない。

創建当時の伽藍配置や規模等については、これまで東大寺式の伽藍配置を持ち、東西500尺、南北450尺の規模であったと推定されていたが、近年の発掘調査による資料の蓄積、分析の進展によって、新たに再検討の必要が生じてきている。

土佐国分寺跡の変遷に関しては、発掘調査による検出遺構及び出土遺物や現存する梵鐘などから、その完全な完成は奈良末～平安時代初頭で、平安時代後半には、火災により創建当時の伽藍は焼失したと推定されている。しかし、具体的な時期の変遷や、伽藍の内容及び性格については不明確な点が今だ多く計画的な発掘調査による検証を行ってゆくことが課題となっている。

現在までの発掘調査によって遺物のうち鏡瓦については、創建当時のものは、6種類が、また、宇瓦は重弧文瓦を主体とするものであることが知られている。これらの土佐国分寺跡の瓦類は、香美郡土佐山田町新改に所在する須江古窯跡群で焼成されたことが明らかである。瓦窯跡出土の平瓦破片には上部に格子目の押捺文系の施文があり、土佐国分寺跡出土例のものと同様である。また同じ土佐山田町に所在する長谷山窯跡群も同様の瓦を焼いたことがわかっている。これらの窯跡は新改川の支流に位置しているという共通点を持ち、新改川から国分川に至る水運によって、本寺院跡に運ばれたことが明白である。

参考文献 国本健児 第四章第二節「寺院」『南国市史』1979年 南国市

『土佐国分寺跡第一次発掘調査概報』 南国市教育委員会 1988年

『土佐国分寺跡第二次発掘調査概報』 南国市教育委員会 1989年



第1図 土佐国分寺跡位置図

II 調査に至る経緯と経過

本寺院跡については、これまで史跡の現状変更等に伴う調査が数回実施され、柱穴等が検出されたが、創建当時の具体的な伽藍の内容を明らかにするに至っていなかった。このため、南国市教育委員会は、昭和62年度より、遺跡の内容を確認し、今後の保存方策を検討するための基礎資料を得ることを目的とした計画的な発掘調査を行うことになった。

昭和62年度に行われた第一次調査では、現書院北側、寺域東側、現金堂北側、鐘楼北側に調査区を設定し調査を行った結果、礎石建物址の一部と考えられる遺構が確認された。また、昭和63年度に実施された第二次調査では、鐘楼西側、大師堂前、現金堂北側を調査し、その結果現金堂北側の調査区より、僧房跡と考えられる掘立柱建物群などが検出された。この結果により、寺域が従来考えられていたより、さらに北側に広がっていた可能性を示すものとして注目される。

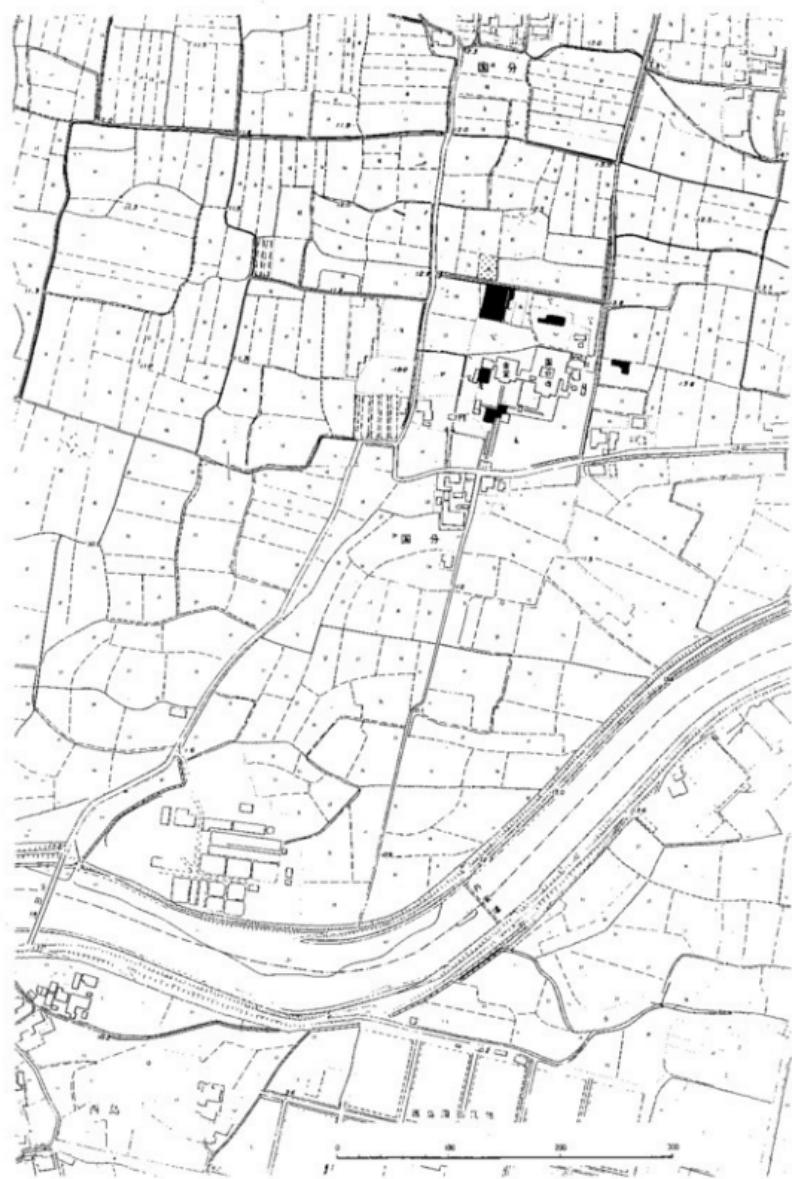
今回、実施された第三次調査では、第二次調査の成果をうけ、現金堂北側より検出された僧房跡と考えられる遺構の北側への広がりと、寺域の北限の確認を目的として行われた。調査地区は、現金堂北裏で、水路・農道をはさんだ北側の畠地に設定した。これまでの推定寺域の北限は現金堂北側の水路周辺とみなされており、今回の調査区は、寺域の外側に該当する。

調査は、表土、及び排土等を重機を使って除去した後、人力で遺構の検出等を行い、併せて測量作業を実施した。発掘面積は約330m²である。

調査期間は、平成2年9月27日から同年11月30日まで、調査期間中台風が3つも通過するという例年にない雨の多さに悩まされながらの調査であった。

註 (1)『土佐国分寺跡第一次発掘調査概報』 南国市教育委員会 1988・3

(2)『土佐国分寺跡第二次発掘調査概報』 南国市教育委員会 1989・3



第2図 調査地区の位置

III 調査の概要

第1・2次調査では、現国分寺書院北側（第1調査区）・寺域東側（第2調査区）・金堂北側（第3調査区）・鐘楼北側（第4調査区）・鐘楼西側（第5調査区）・大師堂前（第6調査区）・金堂北側で第3調査区西側（第7調査区）に調査区を設定し、土佐国分寺跡関連遺構の確認調査を行った。今回の調査では、第7調査区から僧房跡の一画とみられる掘立柱建物群等が検出されたことから、建物群の規模及び内容等、寺域北限を確認するために、第7調査区北側に隣接する畠地について発掘調査を実施し、第8調査区（寺域北側地区）の名称を与えた。

第8調査区（寺域北側地区）

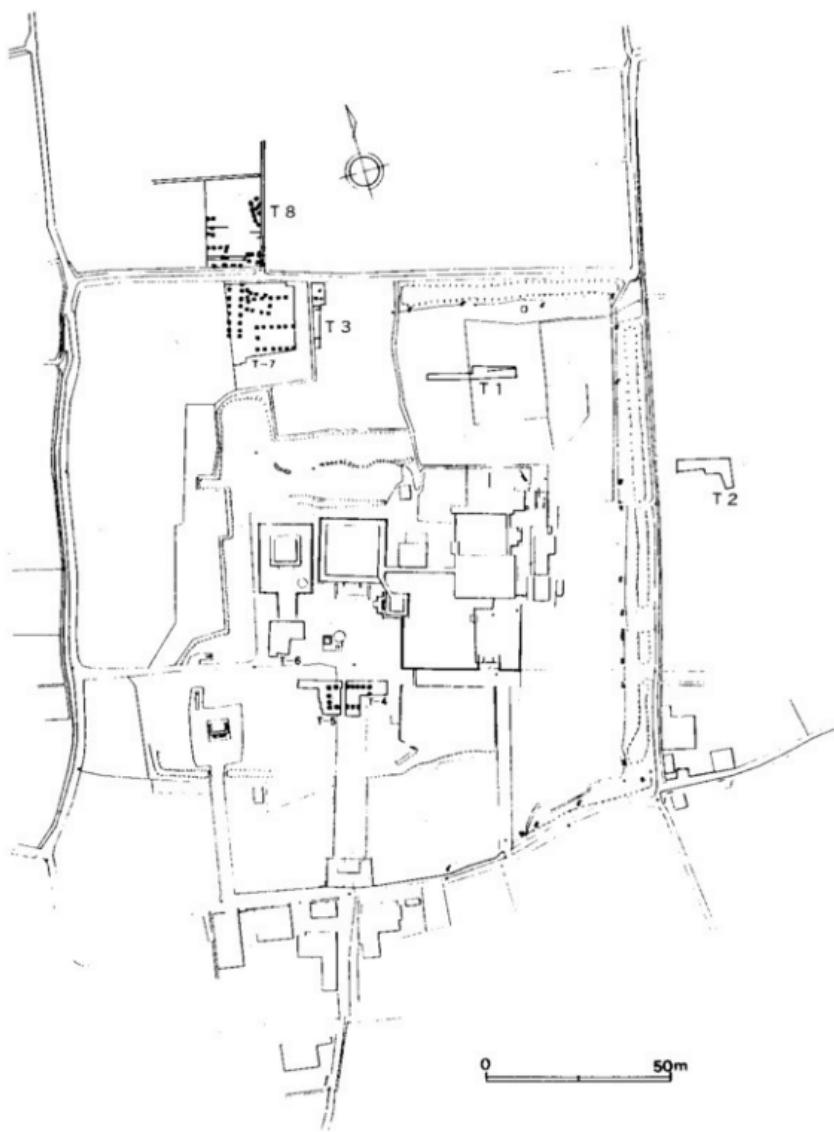
第7調査区と東西方向の農道及び水路を挟んで隣接する畠地に東西14m南北21mのトレンチを設定し、一部西側へ拡張した。調査区では、現国分寺金堂北裏に位置し、調査区南側の農道及び水路はこれまで推定寺域の北限とみなされていた。このため、第7調査区で検出されたS A 1・S G 1の関連遺構及び寺域北限を示す遺構等の検出が期待されていた。

発掘区の基本層序は、第I層耕作土で灰茶色粘砂土、第II層淡褐色粘砂土、第III層黄茶褐色粘質土（地山土）で、第III層上面から遺構が検出された。遺構検出面までの堆積土厚は35～50cm前後で、検出面は調査区北側で標高12.50m、南側で12.30m前後を測る。遺構検出面の標高値は、第3・7調査区とほぼ同様で、標高12.30～50mであった。

検出遺構は、掘立柱建物址・堀・溝・井戸・土塙・柱穴・ピット等で、遺構の重複関係から5～6時期にわたる遺構変遷がみられた。第II層中及び遺構埋土からの出土遺物の内容から、古墳時代後期、白鳳～平安時代後半、戦国時代前半に遺構形成が行われており、検出遺構のなかでS B 9・S A 5・S D 10・S K 2は奈良時代前半～後半に、S B 7・8は平安時代後半に、ピット及び柱穴の一部・S E 2は戦国時代前半を前後する時期に属するものと判断された。

土佐国分寺跡に隣接する遺構としては、S B 9・S A 5・S D 10・S K 2で、これらの遺構は第7調査区で検出された掘立柱建物群に付属する施設であるとみられる。なお、寺域北限を明瞭に示す遺構等は検出されなかった。

検出遺構の内容から、調査区周辺は本寺院跡存続期においては寺域内であったと考えられ、寺域の北側への広がりが確認された。なお、S A 5・S D 10埋土中及び覆土中からは、創建期の瓦類が出土しており、調査区周辺に瓦葺建物址等が所在していることが推察される。



第3図 検出構造位置図

IV 主要遺構と遺物

遺構

掘立柱建物址 (S B 7～9)・堀跡 (S A 4～6)・溝 (S D 7～10)・土塁 (S K 1～3)・井戸 (S E 2) を検出した。

S B 7～9

S B 7・8は調査区北東部で検出された掘立柱建物址で、重複関係をもつ。柱穴中から平安時代後半に属する土師器片が出土した。建物址の北東部はS E 2によって壊されている。S B 7は柱心間の距離1.6m、S B 8は1.2mを測る。S B 9は、東西方向の掘立柱建物址で梁間二間である。一辺0.7～0.8m前後の方形掘方をもち、梁間4mを測る。S D 7を切っている。なお建物配置から、S A 5に隣接する建物址であるとみられる。

S A 4～6

S A 4は南北方面の櫛列である。柱心間2.2mを測る。S A 5・6は東西方向の堀跡であるがS A 5・6で梁間三間桁行四間以上の建物址となる可能性もある。S A 6南側の内容が不鮮明であるため、便宜上区分した。一辺0.7～0.8mの方形もしくは不整円形の掘方をもち、柱心間は1.4～1.8mを測る。S D 10を切る。

S D 7～10

S D 7～10は、東西方向の溝である。S D 7からは、古墳時代後期の須恵器杯・甕・土師器等が出土した。また、S D 10では、奈良時代中頃～後半の土師器及び須恵器・軒丸瓦・丸瓦・平瓦が出土した。S D 7は幅0.4～0.5m、深さ6～14cm、検出長6.6mを測る。また、S D 10は幅0.74～0.8m、深さ10～17cm、検出長10.0mを測る。

S K 1～3

S K 1は調査区中央北側で検出された東西2.4m南北4.0mの不整椭円形の土塁である。須恵器杯、土師器片等が出土し、S D 7と形成時期が近接する6C末～7C前半の土塁であるとみられる。性格は不明である。S K 2は0.7～1.0mの径をもつ梅円形の土塁で、奈良時代中頃～後半の土師器盤・杯・須恵器片が一括出土した。

S E 2

調査区北東隅で検出された井戸跡で、掘方径3.0m、井戸径1.0m前後を測る。掘方堰土中に、中世瓦類(平瓦・丸瓦)が投棄されていた。堰土中から土師質土器片が出土した。

その他

調査区から、柱穴・ビットが検出された。柱穴は、0.5～0.6m、ビットは径20～30cm前後である。建物址・堀等の一部を構成するものとみられるが内容は不明である。柱穴中から、瓦質土器・青磁・土師質土器片が出土しており、柱穴・ビットの大半は中世に属するものと考えられる。

遺物

瓦 (図4～6・1～17)

1は、素弁16葉蓮花文軒丸瓦でSD10埋土中から出土。2は凸面に繩目による叩き目が施された平瓦である。3～10は凸面に格子目の叩き目が施された平瓦で、11は叩き目をすり消して無文化した平瓦である。1～5・9・10はSD10埋土中からの出土。12～14は丸瓦。12の丸瓦は白黄色の色調を呈し、比江廃寺跡出土の白鳳期の丸瓦に類似する。14の凸面には繩目による叩き目が施される。13はSD10埋土中から出土。15～17は、SE2の掘方内から出土。15・16の胎土は砂粒の多い精製粘土を使用し、すり消しによって無文化している。15・16は中世の平瓦とみられる。

土器 (図7、8・1～40)

須恵器 (1～11)

須恵器杯蓋・身・碗・甕・瓶・硯等が出土した。1・5は杯蓋、2・3・6・7は身である。9・10は高台付碗底部、8は瓶底部である。11は硯である。

青磁・白磁 (12～14)

青磁碗12・13、白磁碗14で何れも口縁部の破片である。

弥生土器 (15)

SK1から出土した。甕で外面には横方向の叩き目が残る。弥生後期末。

土師器 (16・18～38)

SK1から出土した古墳時代後期の土器類(16・18・19)、奈良時代中頃～後半の碗・皿・盤類(20～32・34～36)、糸切り底の碗(33・37・38)等が出土した。土師器碗・皿・盤類の大半はSK2埋土中から一括出土したものである。

瓦質土器 (39・40)

檻鉢(39)、鍋(40)が出土した。柱穴・ピットの一部からも鍋類の破片が出土している。

その他 (41)

41は、砥石で、砂岩製の片面に研磨面をもち、使用痕を残す。

V ま　と　め

3次にわたる調査によって、従来不明瞭であった土佐国分寺跡の内容が次第に明らかになりつつある。本年度は、史跡指定区域外である寺域北側地区（現国分寺金堂北裏）を対象とし、第8調査区として発掘調査を実施した。調査で得られた所見と今後の課題について述べることとし、まとめとしたい。

- (1) 調査区は、東西500尺南北450尺と復元される土佐国分寺跡の推定寺域北側で、史跡指定区域外である。調査区南側の東西方向の農道及び水路は、現国分寺北側の土壠（土壤）の延長線上に該当し、これまで寺域を復元するにあたって北限の有力な手掛りにされてきた。第2次調査における第7調査区から、掘立柱建物址群が検出され、北側への広がりが認められることから、今回の調査では遺構等の形成範囲の確認と寺域北限についての確認を主眼に調査を進めた。
 - (2) 調査区からは、掘立柱建物址3棟、堀跡3列、溝4条、土塁3基、井戸1基、柱穴、ピット等が検出され、弥生土器・須恵器・土師器・瓦質土器・青磁・瓦類等が出土した。検出遺構のうち、SB9・SA5はN-16°-Eの主軸方位をもち、埋土中から白鳳末～奈良時代中頃に属する須恵器・土師器・瓦片が出土した。また、SD10・SK2からは奈良時代中頃～後半の上器類と共に、瓦類が出土した。SB9・SA5・SD10・SK2は、出土遺物及び遺構等の内容から、第7調査区で検出された掘立柱建物群に付属する施設の一部であると考えられ、推定寺域の北側に本寺院跡存続期の遺構が所在することが初めて明らかとなつた。検出遺構の内容から、調査区の北側にかけて該当期の遺構が存在する可能性が濃厚となり、創建期の寺域についての再検討が必要となつた。
 - (3) SB7・8、SE2は、寺院衰退期以降の遺構で、SB7・8の建物配置は第7調査区で検出された平安期の建物とは相違をみせている。また、SE2は戦国時代前半以降に廃絶された井戸跡で、中世の瓦類が廃棄されていた。SE2は、寺域東側で検出されたSE1と同様に、中世の屋敷跡を構成する遺構の一部とみられる。SB7・8及びSE2の所在から、平安時代後半以降において、ほぼ現在の寺域（推定寺域北限）となっていたことが推察され、創建期の寺域が平安時代後半以降には縮少されていた可能性がもたれる。
- 今回の調査で、寺域北限は確認されなかつたものの、創建期の遺構の形成範囲はさらに北側へ広がりをもつことが明らかとなつた。今回の調査成果を踏まえ、さらに第1・2次調査で得られた資料を基に、今後の調査では史跡指定区域外からの重点的な調査を実施することが必要であると考えられる。



図1 土佐国分寺跡概要図

図面・図版



第2図 第8調査区（寺域北側地区）遺構平面図

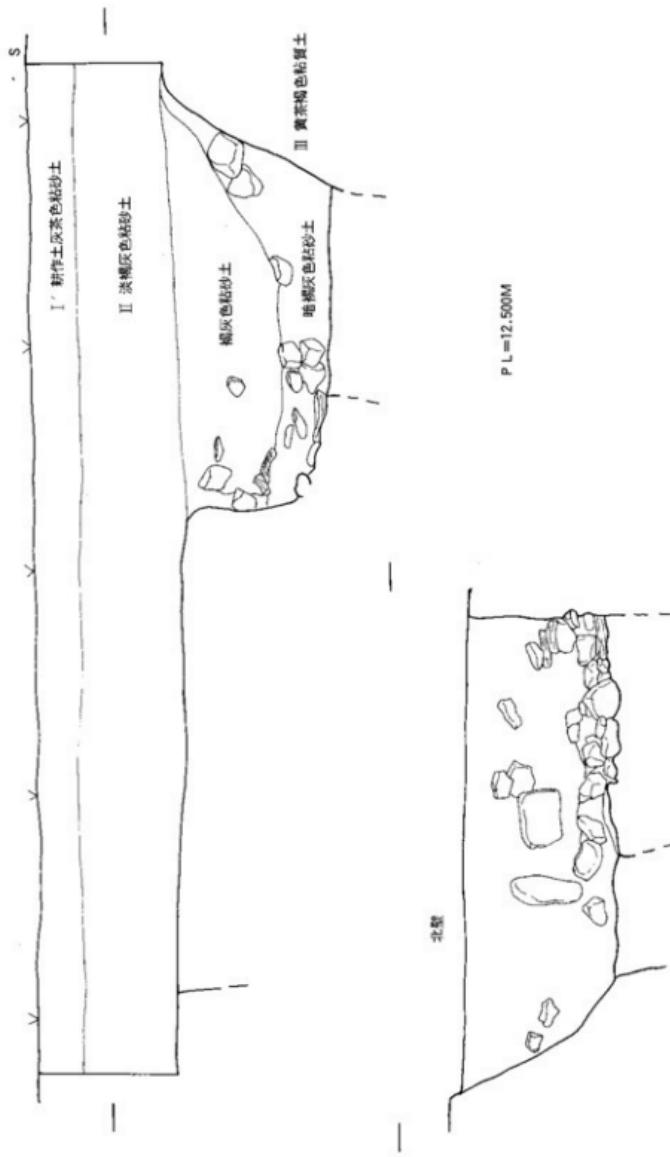


図3 土層断面図 (S.E. 2・調査区東壁)

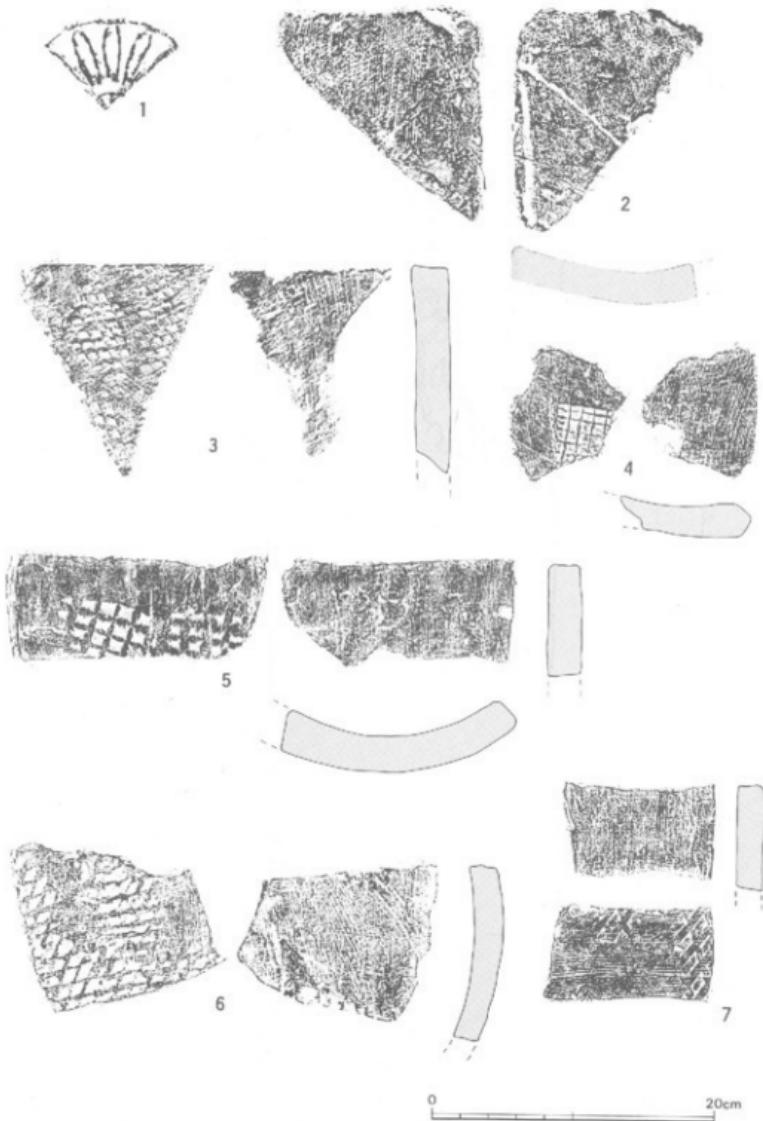


図4 軒丸瓦・平瓦

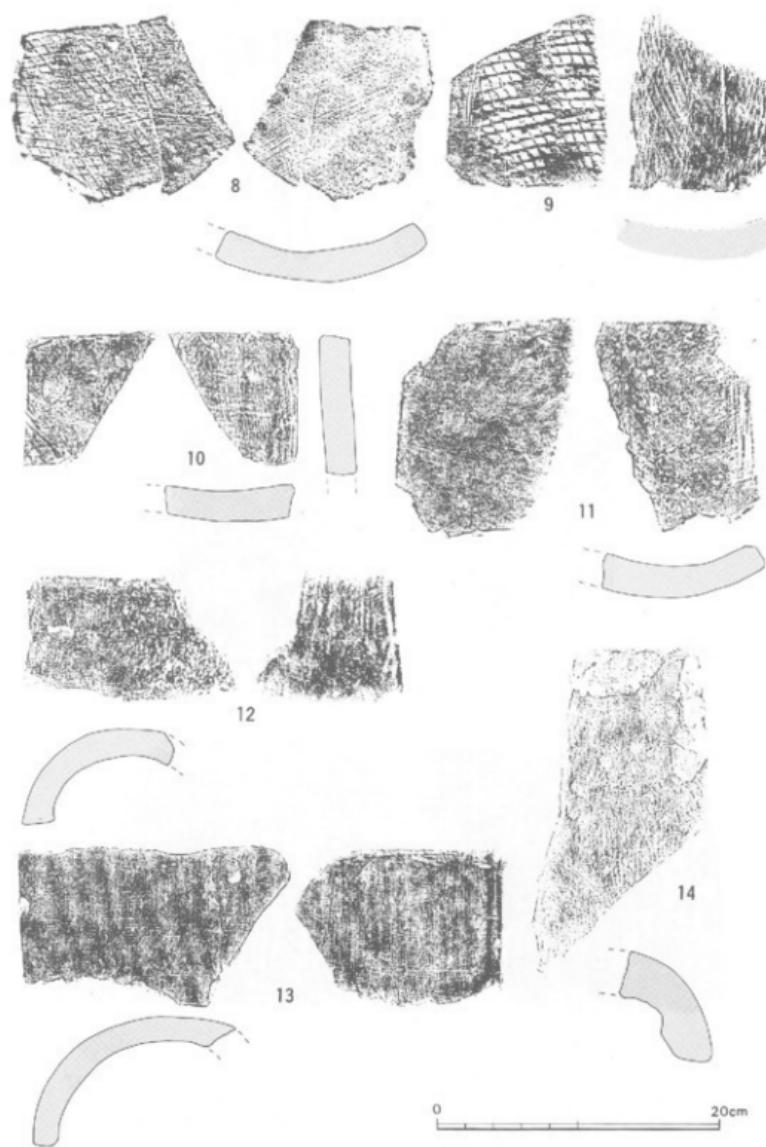
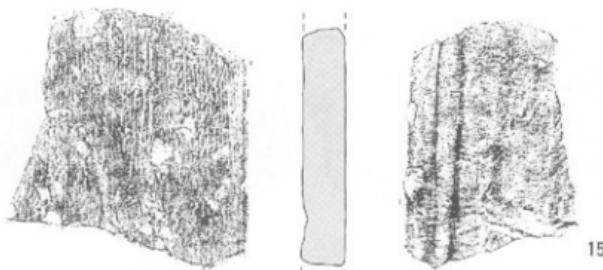
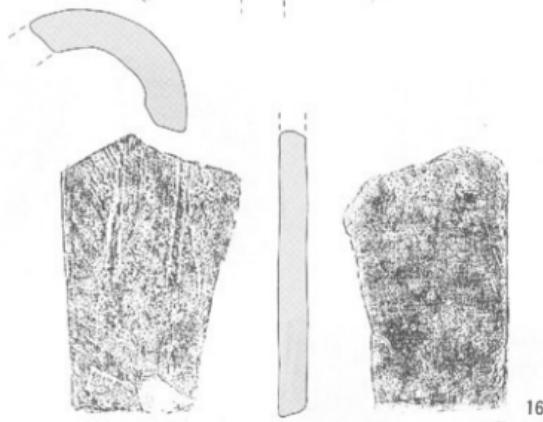


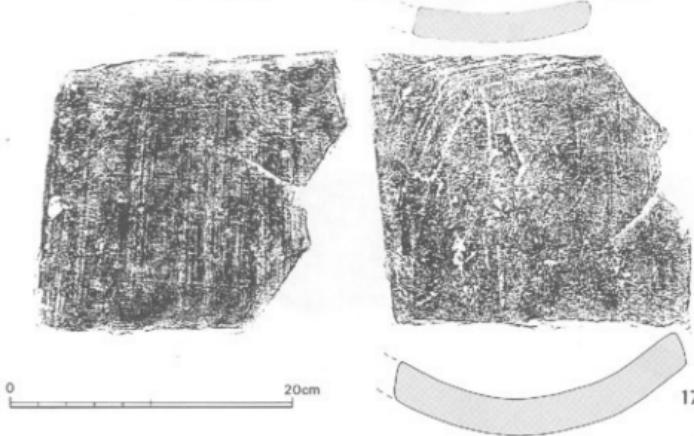
図5 平瓦・丸瓦



15



16



17

図6 丸瓦・平瓦

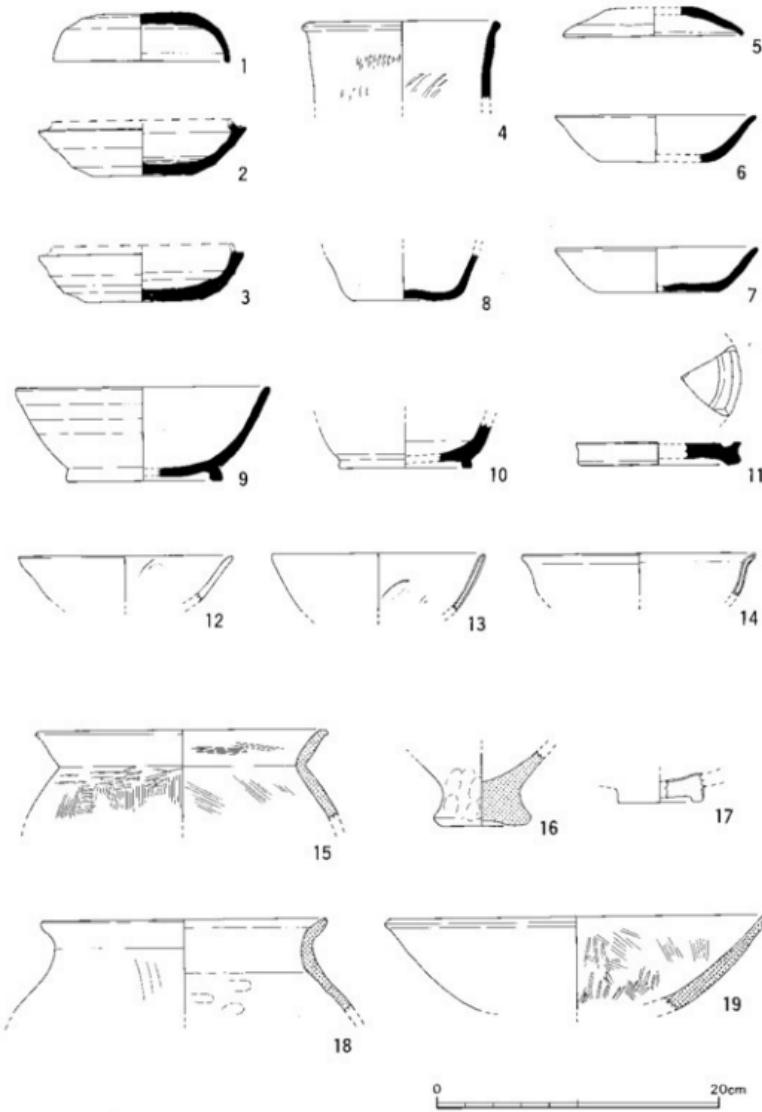


図7 出土遺物実測図（須恵器・土師器・青磁・白磁・弥生土器）

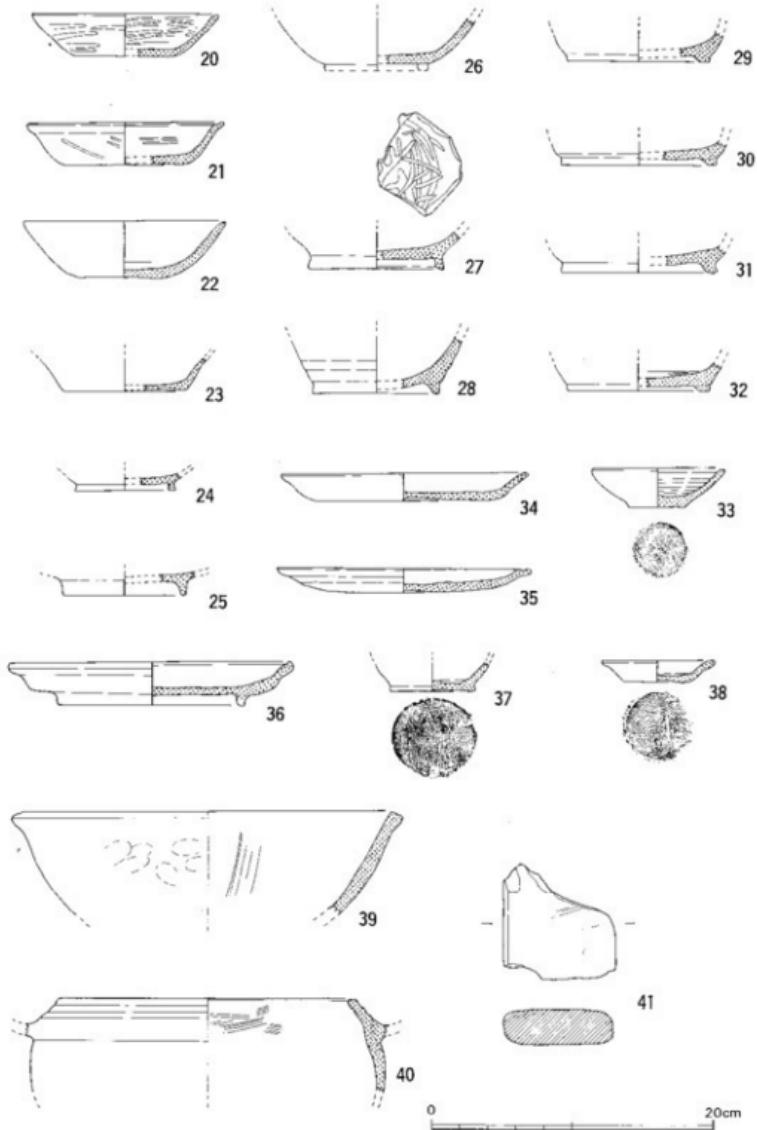


図8 出土遺物実測図（土師器・土師質土器・瓦質土器）



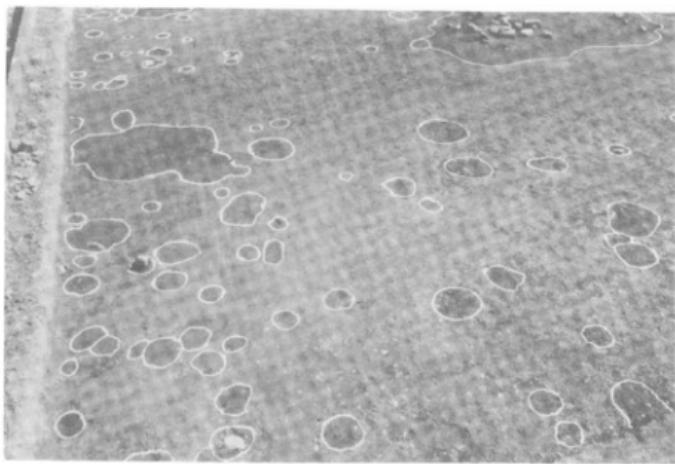
調査風景（北西から）



同上（南から）



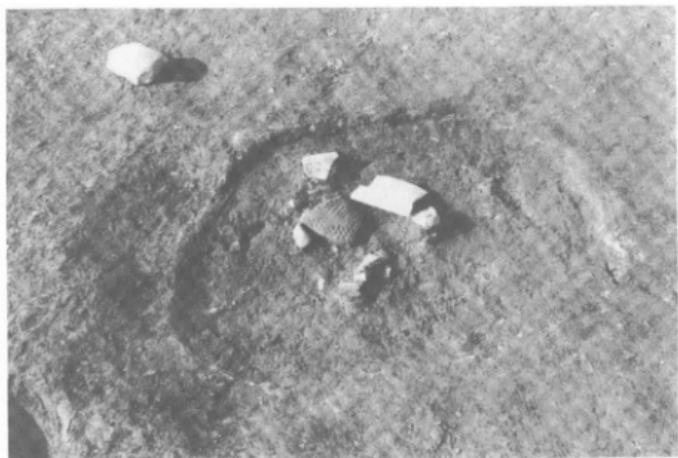
S K 1 検出状態 (南西から)



調査区北西ピット検出状態 (西から)



S D 10 瓦出土状態 (西から)



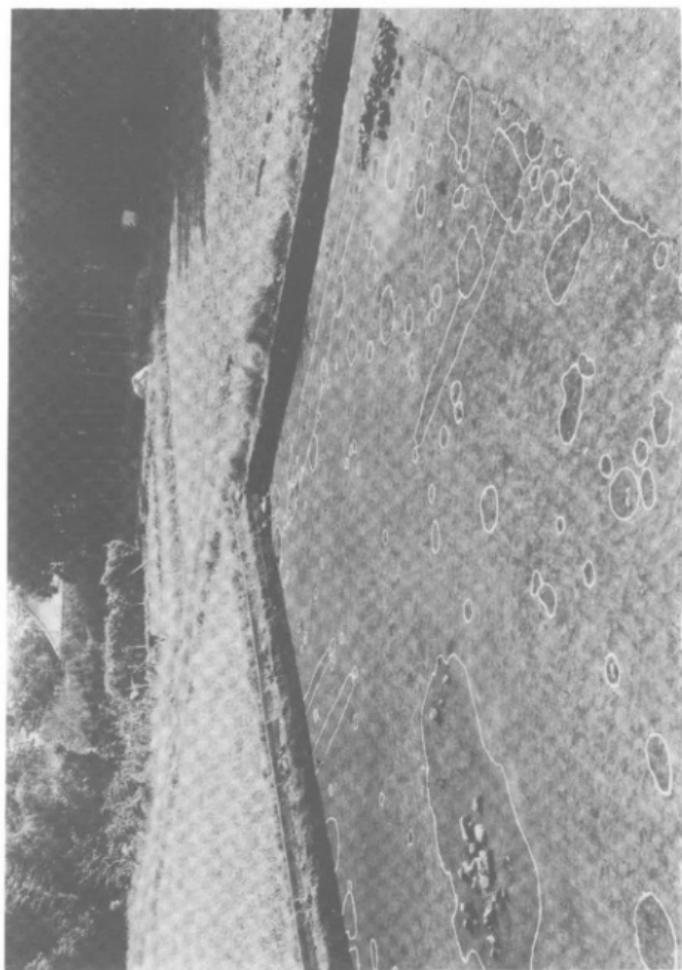
S K 2 検出状態 (南から)



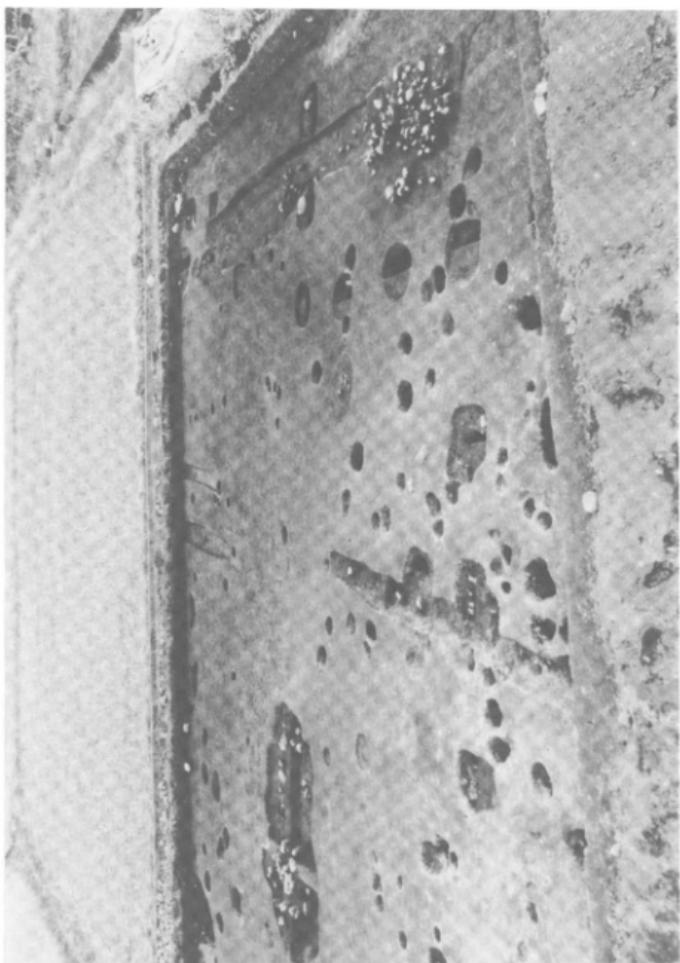
S E 2 (北西から)



同 上 (南から)



調査区南側遺構検出状態（西から）



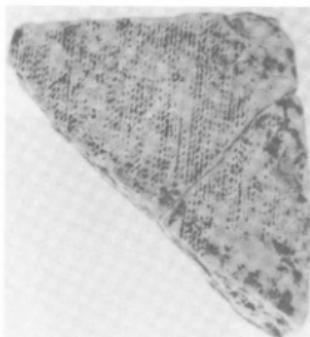
S B 9 · S A 5 検出状況 (西から)



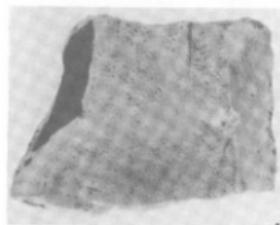
第8調査区全景（西から）



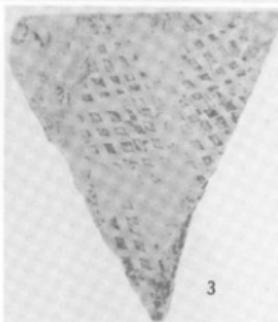
1



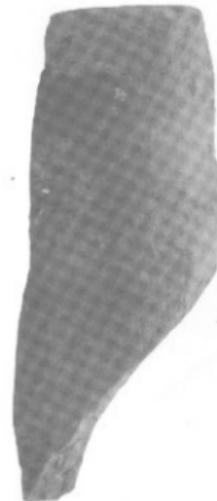
2



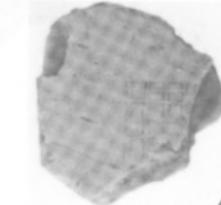
12



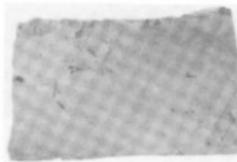
3



14

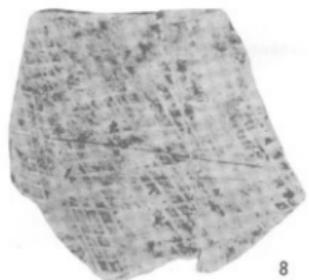


4

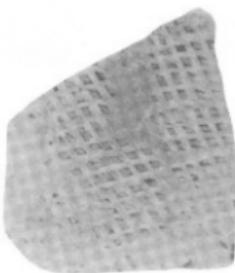


7

第8調査区出土瓦



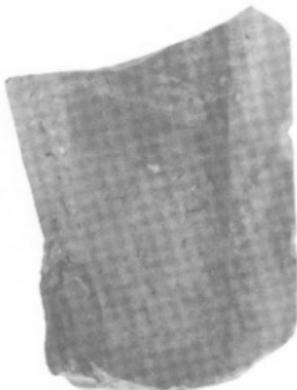
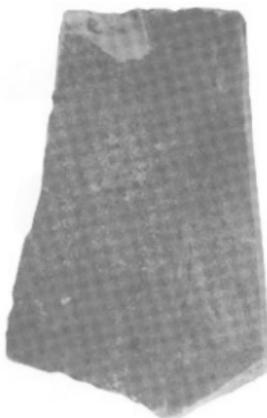
8



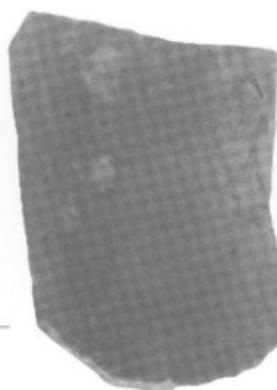
9



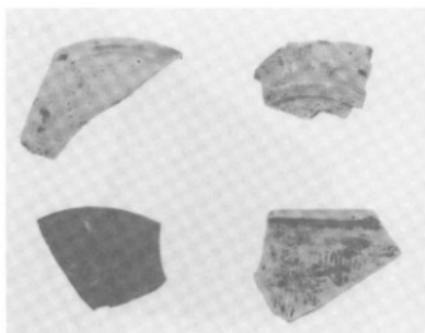
16



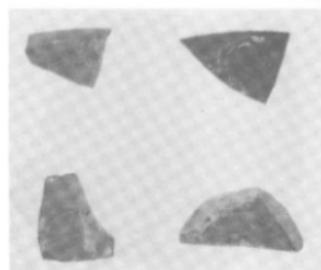
15



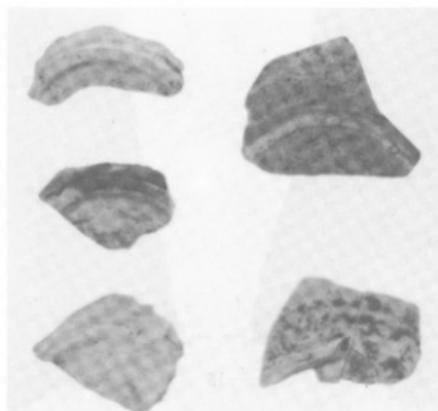
第8調査区出土瓦



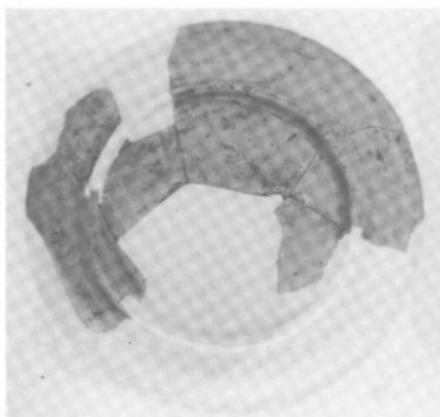
須惠器



青磁



土師器



第8調査区出土土器類

土佐国分寺跡

——第3次調査概報——

平成3年3月31日

編集・発行 南国市教育委員会

印 刷 平和プリント